

ひょうご 水百景

No.8 春来川（新温泉町湯）

～湯煙が川面をなでる夢千代の里・湯村温泉～



写真-1 温泉橋から荒湯と足湯と春来川を撮影（平成23年11月）

■ 「夢千代日記」のロケ地となった湯村温泉

上の写真-1は、湯村温泉街を流れる春来川に架かる温泉橋から、「荒湯」とその前に設けられた足湯を撮ったものです。この湯村温泉をロケ地として、昭和56（1981）年にNHKテレビドラマ人間模様で「夢千代日記」が放送されました。この早坂暁原作のドラマは、広島での胎内被曝によって白血病を発症し、あと3年の命と宣告された永井左千子（夢千代）が、母の残した山陰の小さな温泉町（湯の里温泉）の置屋を女手ひとつで切り盛りする中で、彼女を取り巻く人間関係が多重に交差し、その人間模様を綴った病床日記を通じて物語は展開していきます。

吉永小百合さん演じる夢千代と、置屋に吹き寄せられた人々の織りなす悲しく、切なく、しみじみとした人間模様が反響を呼び、映画化され、また舞台でも数多く演じられました。

このドラマのロケ地となった湯村温泉は、“山陰の小さな温泉町”という設定にぴったりですが、実は最初のロケ地候補は鳥取市気高町にある貝殻節の里として有名な浜村温泉だったそうです。たしかにドラマの中では「貝殻節」が唄われ、夢千代が唄にあわせて踊るシーンがあります。夢千代の部屋からは「日本海が見える」というセリフもあり、「夢千代日記」（早坂暁作詞）という歌の中には「空の下には海鳴りばかり」といった歌詞がありますが、なぜかロケ地は日本海に面した浜村温泉ではなく山間の地・湯村温泉になったのです。

実は、浜村温泉にロケ地の交渉をしたところ、作品のイメージがあまりにも暗いことから地元が丁重にお断りしたとか……そんな記事が某新聞に出ていたことを記憶しています。



写真-2 夢千代像、右手に見えるのは「荒湯」

「湯村温泉」の名は、ドラマのロケ地となったことで一躍全国に知られるようになりました。そして、原爆の犠牲者でもある「夢千代」を平和のシンボルに、と吉永小百合さんそっくりの「夢千代像」が春来川に架かる森下橋のもとに建てられ(写真-2)、湯村温泉のキャッチコピーも「夢千代の里」に。また、天神通りに面して「夢千代日記」の舞台を再現した「夢千代館」が平成16(2004)年に開館しています。

■ 日本有数の高熱温泉で、しかも「美人の湯」～湯村温泉

湯村温泉は、嘉祥元年(848)に慈覚大師^{※1}によって開湯されたと伝えられている古湯で、湯煙に包まれた元湯は「荒湯」と呼ばれ、98℃の高熱温泉です。湯量も毎分470ℓ、湯村全体の源泉湧出量は毎分2,300ℓと豊富で、この豊かな温泉は、旅館だけでなく各家庭にも配湯されています。

泉質は、ナトリウム-炭酸水素塩・塩化物・硫酸塩泉(低張性^{※2}、中性、高温泉)で無色透明、PH7.29の弱アルカリ泉。効能は、神経痛・冷え性・切り傷・慢性婦人病などで、飲むと慢性消化器病・慢性便秘・痛風・肥満症に効果があるといわれています。

「美人の湯」としても名高い湯村温泉の特徴は、温泉に含まれる「メタケイ酸」にあるそうです。メタケイ酸は、ほとんどの温泉に含まれている天然の保湿成分で、肌の新陳代謝を促進してつるつるにしてくれる効果があり、胃の粘膜を修復する目的で胃薬にも使われている成分です。この含有量が温泉1kg中に50mg以上なら肌に有効で、100mg以上なら、強力な“美肌形成のお湯”といえるそうです。では、湯村温泉はどうか。なんと192mgもあり、これが、湯村温泉が「美人の湯」と呼ばれている所以なのです。

※1 慈覚大師：(794~863年)最後の遣唐僧として唐にわたり、日本の天台宗を大成させた。また、朝廷から「大師号」を最初に授けられた高僧でもある。「慈覚大師」は、没後に朝廷より賜った贈り名であり、俗名は円仁。延暦13(794)年、下野国(現・栃木県)に生まれ、15歳で比叡山に登り最澄の弟子となる。42歳の時、遣唐使一行に加えられ、45歳の時、3度目の挑戦でようやく唐に着く。

円仁の渡航目的は、天台宗発祥の地である天台山へ行くことだったが、旅行許可が得られず、そこで天台山より近くにある天台山の和尚もいる五台山という仏教の聖地に行くことを決め、ようやく旅行許可を得て五台山への旅に出る。

この入唐から日本に帰国するまでの9年半にわたる大旅行記が『入唐求法巡礼行記』である。この旅行記は、玄奘三蔵(げんじょうさんそう)の『大唐西域記』、マルコ・ポーロの『東方見聞録』とともに、三大旅行記のひとつとされ、唐の国や仏教中心地の様子が鮮明に窺える古代史の第一級資料といわれている。

帰国後、円仁は天台宗の指導者として、比叡山において教を伝授するだけでなく、当時文化の遅れた東北の人々の苦しみを救おうと、寺院の建立、土地の開発、産業の振興に力を尽くす。仁寿4(854)年、61歳で比叡山延暦寺三代天台座主に迎えられ、貞観5(863)年に71歳で永遠の眠りにつく。円仁が湯村を訪れたのは、唐から帰国してすぐ、円仁55歳の頃ということになる。

写真-3は、「荒湯」にある慈覚大師像であるが、「朝野家」の近くにある薬師堂にも像がある。

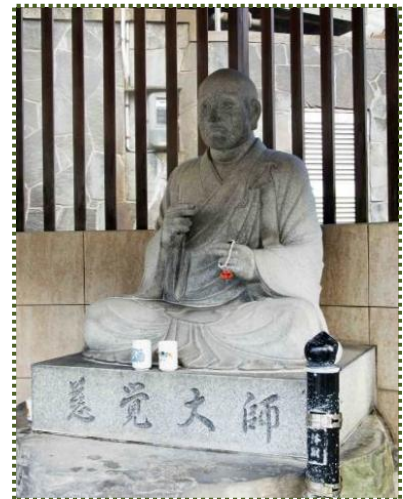


写真-3 荒湯前の慈覚大師像

※2 低張性：浸透圧による分類で、人の細胞液と等しい浸透圧(1kg中8~10g)をもつ液体を等張液といい、等張液より高い浸透圧(10g/kg以上)を持つものを高張性、低い浸透圧(8g/kg未満)を持つものを低張性という。日本の温泉の多くは低張性である。

■ 春来川の親水護岸工事にまつわる裏話2件

湯煙が立ち昇る荒湯、その横を流れる春来川、湯村温泉の顔ともいべき景観です。この湯煙漂う春来川の水辺空間を整備し、訪れる人々が憩える場を創出するとともに、温泉街の町並みと調和のとれた景観を形成するために、国道9号の湯村温泉橋を起点として平成3(1991)年度に親水護岸工事に着手しました。

まだバブルが弾けていない時期とはいえ、県単河川環境整備事業ですから、わずかな予算で上流へ少しずつ整備を進めていました。

このボチボチペースが一変したのが、平成6(1994)年に瀬川平をメイン会場として開催された「第45回全国植樹祭」です。5月22



写真-4 整備前の春来川
(『昭和の湯村おもひで散歩』から引用・加工)

日(日)には天皇皇后両陛下が行幸啓され、その際に湯村温泉の「井づつ屋」に宿泊されることとなりました。きれいな雰囲気の中で両陛下をお迎えしようということで、「荒湯」から見える範囲は徹底的にきれいにするようにとの指示が出され、その一環として親水護岸の整備も予算が潤沢につき、急ピッチで工事が進められました。

温泉町(現・新温泉町)には、湯村温泉保護利用条例(昭和42年9月23日制定)があって、湯地区において地下を掘削する場合は、町長に届け出るとともに温泉に及ぼす影響を回避する措置を講じなければならない、と定められています。そこで県は、温泉町温泉審議会の会長であった吉谷昭彦鳥取大学教授(現・名誉教授)の指導を得て、荒湯と階段護岸の間に高さ1m程度のコンクリート壁を設置(埋め殺し)して護岸工事を施工する、いわゆる「防泉工法」という対策を講じることとしました。

ある日、荒湯前で護岸の床掘りをしていると、荒湯の水位が底まで下がり、さあ大変。湯村温泉旅館組合からは「おみゃーら、泉源を枯らすつもりか。どぎゃーするだあ。」と「どえれえ怒られた」そうです。

さっそく吉谷教授と相談して、早急にコンクリート壁を施工した結果、荒湯の水位も回復、何とか護岸工事を終わることができました。

床掘り後でなければコンクリート壁は施工できないので、一時的にはやむを得ないことだったとはいえ、当時の担当者だったS土木事務所のM副所長は冷や汗をかかれたそうです。



写真-5 荒湯

また、大きな旅館は自ら温泉水をポンプアップしてろ過した上で使用していますが、中小の旅館は温泉橋近くにある河床に埋設した共用の地下タンクからポンプアップしています。残念ながらろ過装置がないため、ある時、床掘りの際に出た濁りが地下タンクに流れ込み、温泉が濁ってお客さんが入れない、という旅館からの苦情があり、これもまた「どえれえ怒られた」そうです。

このように怒られて冷や汗をかいた裏話がありましたが、苦勞の甲斐あって荒湯前の親水護岸は植樹祭前に完成し、親水護岸工事全体も平成8(1996)年度に完成しました。

■ 川も湯になる

荒湯の前を流れる春来川には錦鯉が泳いでいて、訪れる人々を和ませてくれます。泉源に近いので、河床からもわずかではありますが温泉が湧出しています。それを確認しようと手を浸けてみたのですが、まさに湧出しているところに浸けたので、「アツ!」。危うく火傷をするところでした。

高温泉の湧出は、冬場はいいのですが夏場は錦鯉が茹(ゆ)だってしまい、水面に顔を出してアップアップしている光景が見られたそうです。そこで県が、河床に石を横断方向に並べて堰をつくり、水深を深くすることにより水温上昇を抑えるようにしたとか。

ところで、増水すると鯉が流されてしまうのでは、とつい気になってしまいますが、後で下流に探しに行き回収するそうです(ほんまかいな!)



写真-6 荒湯前の春来川を泳ぐ錦鯉

■ 足湯 ～「湯村大根物語『ふれ愛の湯』」

平成13(2001)年4月に荒湯前に誕生した天然かけ流しの「足湯」(写真-7)。長さ7mの足湯が3ヶ所。74人が同時に入れるとされる公衆足湯で、県が施工し、維持管理は湯村温泉旅館組合等が行っています。

この足湯のサブタイトルが「湯村大根物語『ふれ愛の湯』」。足湯に並ぶ大根足をつい想像してしまいましたが、そうではなく地元の名産である「畑が平(はたがなる)大根」にその名の由来があるとか。

この大根は、きめが細かく、太すぎず細すぎず、ほど良い長さで太さでみずみずしく美味しい大根だそうで、こんな大根のイメージに地域の発展を重ねて、訪れる方が膝小僧を並べて楽しくふれあえる場所になれば、との思いで命名されたそうです。眼前を流れる春来川に泳



写真-7 錦鯉を見ながらの足湯

ぐ錦鯉を眺めながら、疲れた足を浸すと柔らかな温かさがじんわりと身体を包みます。

平成 23 (2011) 年 9 月 3 日の台風 12 号により春來川が増水、足湯に土砂が流れ込み、一時は使用不能になったそうですが、湯区財産区、観光協会、旅館組合の手で土砂を除去して 5 日に完全復旧したそうです。

なお、平成 26 (2014) 年 12 月 20 日、この「足湯」がリニューアルされています。

■ 荒湯周辺をライトアップ、川面に灯りがゆれる

著名な照明デザイナーの石井幹子(もとこ)さんによるライトアップ芸術。荒湯の周辺を毎日日没後 30 分から 22 時まで実施されます。

温泉街から清正(せいしょう)公園展望台の方を見上げると「夢」という文字がライトアップに浮かび上がり、春來川の川面にゆれる灯りと「荒湯」から立ち昇る湯煙が心をほっこりさせてくれます。

筆者は、湯村温泉街が一望できる清正公園展望台に登って写真を撮ろうと 200 段を超える石段を登りましたが、プチメタボの体にとっては正直きつかった。

公園の名は清正公信仰(法華宗の熱心な信者・保護者であった加藤清正を崇敬する信仰)に由来し、法華経を信仰する人々が熊本に赴いて加藤清正の「護神」を授かり、当地に「清正公様」として祀ったとか。

また「夢」の文字は、「夢千代日記」の舞台であることに因んでいるそうです。



写真-8 荒湯付近の夜景



図-1 湯村温泉街周辺の地図



写真-9 清正公園展望台から湯村温泉街を望む

■ 春來川沿いの「古くからの湯治場としての歴史」を活かしたまちづくりを進める

湯村温泉街は、その中心を春來川が流れ、川沿いのわずかな平地の狭い道に沿って旅館や民家が軒を連ねています。『夢千代日記』のロケ地として一躍有名になり、温泉ブームと相俟って、年間宿泊客数は40万人近くになりましたが、バブル崩壊や阪神・淡路大震災以降の観光客の落ち込みが見られる中、古くからの湯治場としての歴史を活かしたまちづくりを進めており、新温泉町湯・細田地区が平成18(2006)年4月1日、兵庫県景観形成条例に基づく「まちなか景観形成地区」に指定されました。

■ モノローグ

湯村温泉街を縫うように流れる岸田川水系右支川の春來川。川の名は、源流にある小集落・春來地区に由来しています。

春來地区はその昔、椿の木が多く自然と椿村と呼ばれるようになりました。後に椿の林を伐採して開拓した折に、椿の文字も解体して「春木」に。さらに冬の積雪が2mにも及ぶ地域に春が早く来ることを願って「春來」と表すようになったとか。

吉永小百合さんが歌う『夢千代日記』(早坂暁作詞・吉田正作曲)の2番に以下のような歌詞があります。



写真-10 荒湯前を流れる春來川(撮影年不明)
(『昭和の湯村おもひで散歩』から引用)

♪春來川に 雪が流れてもう 春ですね

明日(あした)信じて 橋のたもとで待っていた♪

(日本音楽著作権協会(出)許諾第2002594-001号)

鉛色の空の下、雪深い地で、春が来るのを一日千秋の思いで待つ。川と共に生きる地域の人たちの願いが、「春來川」という川の名に込められています。

正福寺桜

温泉橋近くの正福寺にある天然記念物「正福寺桜」の見頃が4月中旬ということで、4月17日に行くと残念ながらほとんど散っていた。ヤマザクラとキンキマメザクラの自然交配種で、開花時の八重咲の花と葉の色が絶妙とか。昭和9(1934)年に牧野富太郎博士が学会に発表した非常に珍しい品種。学名は「ブルヌスタジマ エンシス マキノ」。



写真-11 ほとんど散っていた「正福寺桜」

【参考資料】

- 1 『昭和の湯村おもひで散歩』 新温泉町商工会
- 2 『夢千代物語』 温泉町観光協会他発行
- 3 『兵庫史を歩く(完結編)』 NHK 神戸放送局・姫路支局編 平成4年7月
- 4 『広報 しんおんせん〜まちなか探索: 峠の村 春來』 新温泉町 平成25年7月
- 5 『清正公園』 フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

※発行: 平成24(2012)年1月 『ひょうご水百景』No.8
改訂: 令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』No.8